自然と教育

第17号

2007年 3 月 30 日
奈 良 教 育 大 学
自然環境教育センター

かっての演習林での演劇部の合宿風景

目　　次

今野博信：公開講座「夏の森企画」を総合学習に組み立てる…… 2
西澤真樹子：大人も子どももいっしょに解剖
　　－標本作製サークル「なにわホネホネ団」の活動から－ …… 7
匿名さん：鹿いじめ悪童記…… 10
鳥居春己：中国内蒙古調査紀行…… 15
平成16・17年度 自然環境教育センター事業報告 …… 22
編集後記…… 29

公開講座「夏の森企画」を総合学習に組み立ててみる

今野　博信

前回のキャンプに押しかけて以来、この「夏の森を親子で楽しもう」の魅力にはまってしまい、今年も参加させてもらいました。せっかくの体験なので、できれば他の環境（学校条件）でも実現できるような汎用化を考え、頭をひねることにしました。この企画の独自性と魅力は、まさしく才能あふれる個性的なスタッフの陣容と、意欲に満ちた参加者との共同作品（コラボレーション）と言えるので、別な条件での実現は難しいかもしれません。それでも何とか考えてみたくなったのは、少しでもこの企画の魅力を広め、参加した子ども達と一緒に感動を共有できる楽しさに期待しているからです。体裁として「学習指導案」めいた形になっていますが、学校以外の団体ならより一層柔軟に工夫して取り組めるものと思っています。なお、対象学年は募集要項に合わせて3年生から6年生を想定していますが、条件によっては、全校（1年生から6年生まで）の企画でも可能だと思っています。

総合的な学習の時間」活動計画

1．活動名　夏の森を親子で楽しもう

2．活動について

・地域の環境を生かした活動を通して、参加した子ども達がその地域の特性に気づき地域社会の一員であるとの自覚を高めるようになることは、総合的な学習の時間だけにとどまらない意義をもっている。ここでいう「地域の環境」とは、単に自然環境を指すだけではなく社会的な環境、例えば身近な専門家などの人びととのつながりも含まれている。子ども達が学校を離れ、信頼のおける大人達と共同しての体験を積み上げていくことは、他の学校内活動では得られない内容をもつものになろう。

・子ども達の活動は、通常は同一学年内で取り組まれることが多いが、そうした枠組みを超えた異学年間で共同して取り組む活動は、困難さを伴うが得難い体験となり得る。さらに全学年が同一の活動に取り組む例は、あまり多くないのだが、そうした場合の体験が含む内容は、とても豊富になることが予想される。その活動を支え安全を確保するために、学校内の担当者だけでなく積極的に学校外の協力者（解説担当の専門家、活動補助の保護者など）を組み入れていくならば、子ども達の体験は一層の豊かさと安心をもたらすものになるであろう。

・同じ目的を達成するのにも、いつもとは違う別な方法を用いることで日常生活との大きなズレを体験し、普段の生活スタイルを見直すよい機会となる場合がある。例えば、炊飯の例でいうなら、日常生活ではスイッチ一つで他に手間はかからない。もしかすると、子ども達はそのスイッチを入れるという動作さえも、家庭で体験していないのかもしれない。そうした前提に立つなら、あえて普段と違う手間のかかる手順で炊飯するような活動は、特別な感慨を子ども達に与えるものになろう。炊き上がりの出来不出来に、自分達が責任をもたなければならないわけで、食べることの切実さやうまくいかないことがある現実への気づきを与えてくれるはずである。

・日常の生活範囲から大きく遠ざかることで、自分達の地域を見直す契機となり、また離れた場所にもそれぞれの生活があり、それらも含めて自分達の生活を成り立たせる地域であることへ気づく体験はたいへん貴重なものである。予めの調べ学習などの準備で、地域の特徴を理解しておき、親しみをもつことは大事なことである。

3．活動のねらい

○地域の環境について調べ、体験して、自分の気づきを発表できるようにする。

○他の学年に対して手伝いや手助けをし、あるいはそれらの受け入れができるようになる。

○自分達の活動を計画し、実行し、その結果を引き受け、片づけ反省ができるようにする。

○お世話になった人びとへの感謝の気持ちを表すことができる。

※これらの活動目標は、学年全てに当てはまるような表現になっている。それぞれの学年や子ども個人にとっての具体的な目標は、別に設定されるものとする。

4．児童の実態

総合的な学習の時間としての取り組みでは3年生から6年生までが対象となるが、受け入れられる側としての参加なら1年生2年生を組み入れることは可能である。その場合は、学校外からの協力者を多めに依頼することになろう。

子ども達の生活体験の実情を事前に充分把握しておくことが必要になる。具体的には、キャンプの体験や、調理体験、火の扱いなどの体験を、個人としての技能の程度として調べておくことになる。グループ活動についても、個々の体験量を調べておく必要がある。

実施の形態は、学年を混ぜた子ども達のグループをつくり、全校規模によって数期に分けて活動に取り組むことになる。単純に1学年規模の人数を複数グループに分けて1期の実施とすると、合わせて6期の実施計画となる。

活動が複数年にわたって定着してくると、前の年度に上級学年が取り組んだ様子が個々の子ども達の記憶に残るようになるので、自分達の行動を自覚しやすくなるものと予想できる。このことから、継続しての実施が大きな意味をもつと判断できる。しかし、学校事情によっては隔年実施になる場合もあるので、その際には実施記録を残したビデオなどの活用で継続状態を意識的に維持する必要がある。

5．活動の全体計画

	1・2年生		3・4年生		5・6年生	
学年別目標	・自分でできそうなことは、人に頼らずにやってみる ・助けてもらったこと対して、お礼が言える		・山岳地域の様子に気づける ・できることできないことの見きわめができる ・手伝ってもらったことにお礼を言える ・自分達の活動を記録できる		・自分の経験を元に下級生への心配りができる ・他の人も含めた計画を立てられる ・依頼状や礼状を書ける ・活用を前提にした記録保存	
4月	(人が話しているときの聞き方、自分が話すときの話し方、みんなで集まるときの集まり方、一緒に歩くときの歩き方)		**自分のできること やってみたいこと** ・今までに体験したことを相互に発表し合って、できることを確認する。 ・夏の森を楽しむには、どのようなことができるとよいのかを考える。 **実際に試してみよう** 簡単な調理の体験をしたり、テントを張るなどの活動をしてみる。	6時間 8時間	**参加者のために準備することは何だろう？** ・低学年も含めた参加者全員の安全と有意義な活動のために何が必要かを話し合って決める。 **自分達は何ができるか** ・共同して活動できるように参加者に何を頼むか、自分達は何をするかを決める。	4時間 4時間
5月	(学校の仲間達、おにいちゃん達おねえちゃん達、学校のまわりの様子)		**できないことは、手伝ってもらおう** ・自分達ではできないこと、危険なこと、知らないことを確かめたら、手助けしてもらえるように頼む。 ・誰に頼むとよいのか、どのように頼むとよいのかを考えて、依頼文を書いたり、実際に出	10時間	**グループ分けと実行計画** ・他の学年にも伝わりやすい内容でグループ分けと活動計画を決める。 ・内容説明と質問に答えるために他の教室を訪問する。 **難しいことには、応援を頼もう** ・自分達では無理な活動	8時間 4時間

5月			向いてお願いする。		には援助を依頼する。 （専門家、保護者）	
6月	（季節の違い、場所の違い）		**どのような場所と時期なのかな？** ・目的地の様子を調べておき、何を見たいか、何をしたいかを計画する。		**活動内容を試してみよう** ・調理の実習、材料の準備、火起こし、片づけ、テント設営などを練習してみる。	12時間
7月	**参加** ・無理はしないが、できそうな我慢はしてみる。 ・助けてもらったことには感謝の気持ちを表す。 ・自分ができることは、やってみる。	12時間	**準備と実行** ・用意するものを決めて準備を整える。 ・グループ分けと話し合いをする。 ・計画と記録のための手帳などを作っておく。	12時間	**準備と実行** ・自分達の用意と、他の学年に頼む用意を確認する。 ・グループでの話し合い ・安全を確保するための約束事を確認する。	12時間
9月	（記録の画像などで思い出してみよう）		**まとめと記録** ・作文や感想文、採集した植物標本など	4時間	**まとめと記録** ・翌年の実施のために ・お礼状も出す。	6時間
	12時間		50時間		50時間	

6．キャンプ活動の計画

当日の活動内容は、できるだけ現行の内容にそって実施したい。具体的には、つぎのように計画されている。

	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
第1日目	集合		出発（バス移動）			昼食	テント設営			夕食準備	夕食		自然観察	就寝準備	
第2日目		起床朝食	自然観察（山歩き、昼食）					自由時間（釣り、カヌー、工作）		夕食準備	夕食		昆虫・植物採集の整理と発表会	就寝準備	
第3日目		起床朝食	林業体験と木工作		昼食準備	昼食	後片づけ	現地出発（バス移動）			解散				

7．活動の留意点

準備段階と当日の活動、振り返りの三段階に分けて、それぞれについて配慮すべき点を明らかにしておく。

①準備段階

・子ども達自身が何をどこまでやる必要があるのかについて、しっかり把握しておくことが求められる。そのためには、自分達の技量や体験を付き合わせるための時間が、たっぷり用意されなければならない。

・高学年には全体を見通した計画立案が期待されているが、その基準となる体験量には個人差が大きいことが予想される。その点への指導者側からの手助けが、必要になってくるはずである。しかし、子ども達が自分で実際に試してみる機会や、他学年の実情を見学しに行くなどの時間が確保されるなら、適切な計画を立てられる可能性は高い。

・自分達の普段の生活とは様子の違う地域に出か

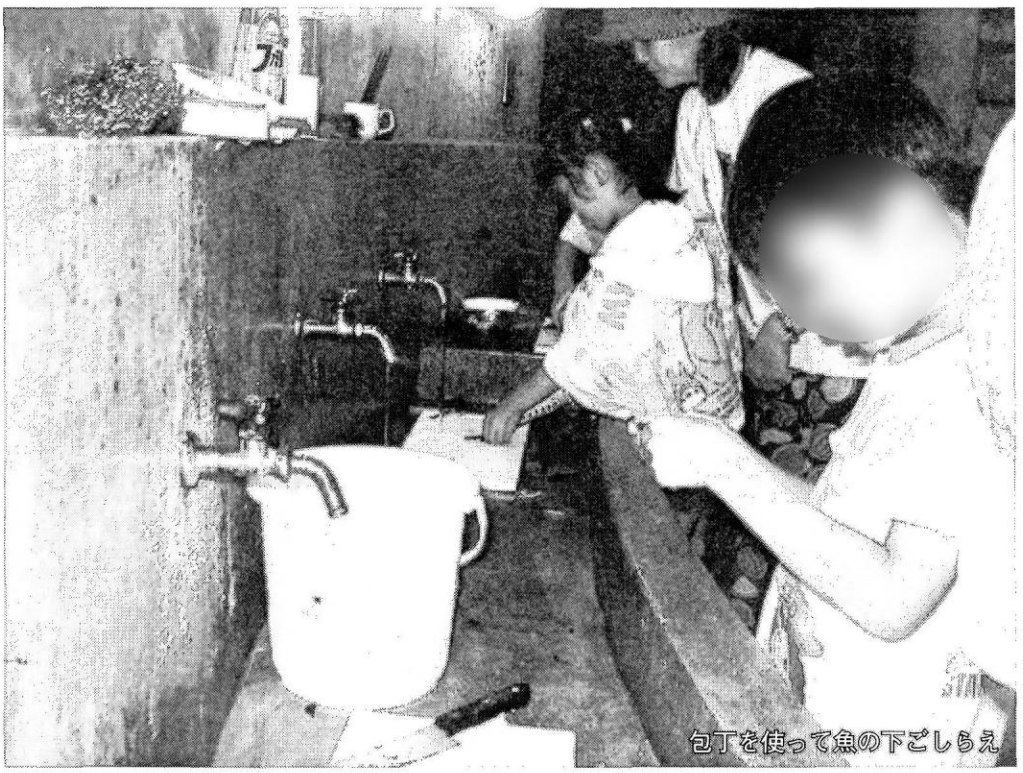
けるので、その点の違いを事前に調べておくことの重要性を強調しておくべきである。奈良県の北部は平坦な盆地となっているが、南部の山間地域は高度も高くなり山に囲まれた景観になる。そのことを想像させたり、気温について予想させたりする活動は、子ども達の興味や関心を高めるはずである。また、バスでの移動中にも途中の地域ごとの特徴に気づける可能性もある。例えば家の造りに注目することで歴史的な興味へとつながっていくこともあるので、その点での助言に配慮しておく必要がある。

雨の晴れ間の登山でした

・協力者には、自然環境の理解を深めてくれる専門家と、キャンプ生活を支えてくれる保護者が想定されている。知りたいことが先行して、昆虫や動物・植物の専門家ばかりに目が向いてしまうことで、生活部分の援助者を忘れてしまうこともあり得る。自分達のできないことに、気づけるように助言を与え、その為の手助けを求める大切さを感じとらせたい。
・協力の依頼文を用意したり、実際にお願いする際には、子ども達の活動だけに任せないでできるだけ事前の打ち合わせをしておきたい。しかし、その打ち合わせ結果が、子ども達の活動を先取りするものになったり、細かな制限や指示となるのは避けたい。
・保護者の参加で安全を確保できることが理想であるが、人数が充分にそろえられない場合には学生ボランティアなどに依頼することも考える必要がある。その場合に、実施に際しての趣旨を理解してもらうのは当然のことである。
・必要な物の購入や事前の準備などで、協力者に金銭的な負担をかけることのないように注意が必要である。会計は明快に進め、決算結果も保護者全員に報告すべきである。

②実施当日

・安全確保を第一に考え、天候などの自然条件や、交通事情、参加者の健康状態などによっては延期や中止を含めた実施の当否を判断する必要がある。
・食事準備の際に、グループによっては失敗する場合もあるので、余分な量の食事を用意しておく配慮が必要になってくる。その場合の余分な食事が実際には利用されなかった場合も、すぐにそれを廃棄するのではなく別な利用法がないか考えられるとよい。例えばおにぎりにしておくなど。
・山歩きの際には、怪我などに対応できるように救急セットなどを用意する他に応援を頼めるような人員を確保できるようにする。
・炊事には危険が伴うので、充分な安全確保の手だてが講じられる必要がある。また天候によっては急な雨降りもあり得るので、その場合の対処方法にも配慮する必要がある。
・採集した動物、植物をお互いに発表し合う際には自分で調べられるような図鑑や標本が用意されていることが望まれる。自分の発表だけにとらわれてしまい、他の人の発表に関心を寄せないことがあっては困るので、しっかり聞けるような態度や、発表内容に応じた質問ができるような動機付けが必要になる。
・各種の活動に際して、高学年には記録を残す役


包丁を使って魚の下ごしらえ

割も分担できるようにする。それは、次回の取り組みに生かされるものであることを意識しての活動となる。

③振り返り

・お礼状を書いて送る際には、義務感だけで取り組むのではなく、自分達の体験を意義づける活動として自覚できるようになることが期待される。

・高学年にとっては、自分達の立てた計画が協力者のおかげで実行できたことに気づくだけではなく、参加してくれた他の学年の協力もあったことに気づけるとよい。

・低学年の子ども達は、リードしてくれた高学年の存在に気づいたり、協力者の手助けに感謝する気持ちをもてることが期待される。

・次回の実施に際しては、今回の活動を下敷きにして次のステップの発想ができるようになることに意識を向けさせたい。そのためには、活動後の思い出を各自で印象深く残しておける工夫が求められる。

8．さいごに

実際の取り組みでは、参加人数の規模によっては実行が難しい場合もあり得る。炊事道具やテントの数などは、大きな制約条件となるであろう。それでも、協力者の手助けを得て何らかの形で実行できるような工夫をできるだけ凝らしてみたい。また、集団活動の側面が強調され安全優先が前面に出ることで、活動内容への規制が強くなる可能性がある。しかし、それが過度に進みすぎてしまい、せっかくの魅力がしぼんでしまうことは何としても避けたいことである。

時間の使い方の大らかさと年齢を超えた相互のつながりが、このキャンプの魅力の源泉になっているはずである。その特徴が最大限に発揮できるように実行されるなら、子ども達の体験は広く深く個性的に印象づけられていくことであろう。

学校だけの体制では為し得ない内容を、保護者や学校外の専門家を巻き込んで実行していく気運が高まっていくなら、現在の教育への不信感や学校に向けられた一方的な批判もいわれなきものとして解消していく可能性もある。多くの魅力を秘めたこの「夏の森を親子で楽しもう」がさらに発展していくことを期待してやまない。

教育臨床分野大学院生（登別市立鷲別小学校）

大人も子どももいっしょに解剖

－標本作製サークル「なにわホネホネ団」の活動から－

西澤真樹子
大阪市立自然史博物館外来研究員
NPO法人大阪自然史センター
なにわホネホネ団 団長

わたしたちのホネホネ団

なにわホネホネ団は、大阪市立自然史博物館を拠点に活動する動物の標本作製サークルである。標本といっても生きている動物を扱うのではなく、交通事故やガラスに衝突死した哺乳類や鳥類の「死体」がわたしたちの材料だ。死体は「どのような動物がいつ、どこにいたか」を証明する自然環境の記録そのものであるが、もちろんそのままでは資料になれない。放置すればすぐ腐ってしまい、生前その動物が持っていた貴重な情報が失われ、価値が落ちてゆく。たとえ運良く博物館に持ち込まれて冷凍庫で凍結保存されたとしても、乾燥などの劣化は避けられない。死体が資料として価値を持つためには、解剖をはじめとした標本づくりの手順を踏む必要がある。

ホネホネ団は、その「死体」を処理し、博物館の収蔵標本に作り上げる一種の技術者集団を目指している。とはいえ、すでに技術を身につけた専門家ではなく、団員の多くは素人。生きものに興味のある6歳から70歳代までの団員73名（2007年1月27日現在）が毎月1－2回のペースで博物館に集まり、製作に励む。基本的には各々が何をするかは自由で、解剖がしたい人は解剖し、鳥類の仮剥製を習いたい人は学芸員から教わる。拾った鳥の全身骨格を組む人を手伝って、欠けた骨をプラスチックで成型する人もいる。もちろん遊軍のようにその日ある作業を手伝ってくれる人もいる。ある時は参加者がずらりと並んで毛皮なめし。ある時は、天王寺動物園からやってきたゾウの骨格をクリーニング。初参加の見学者にもどんどん仕事が割り当てられるので、一見誰が本当の団員かわからないほどだ。見学初日に、カマイルカの外れた椎間板を木工ボンドで椎骨にくっつけていく作業をふられた親子はすっかりはまってしまい、即日入団。それからはほぼ欠かさず参加している。

ポリシーは「みんなで楽しく」！

ホネホネ団のいいところは、解剖という、知識以上に経験値がものをいう作業を、誰もが文字通り好きなだけ行えるところにある。数を丁寧にこなせばそれだけ技術力も上がり、周囲に尊敬される。おお

解剖風景

まかな傾向はあるものの、手先の器用さと根気は年齢に関係ない。四苦八苦している初参加の大人を手練の小学生団員が指導することは、ホネホネ団では日常の光景だ。

ホネホネ団の入団資格に年齢制限を設けていないため、参加者の立場は実に多様だ。学芸員は標本の技術や意味、生きものの生態を解説し、獣医師は動物の体の機能や死因の分析をしてくれる。グッズ製作が得意な小学生は、販売用オリジナルホネグッズを開発する。図書館司書の団員は文献を探し出す。

テンの解剖　開始

デザイナーは標本をスケッチし、研究会のポスターや絵はがきを作成する。飼育が得意な高校生はその生きものの生態を伝授してくれる。

ひとりの立派な「先生」を囲んだサークルではなく、それぞれの才能や知識を持ち寄って成り立っているのがおもしろい。それぞれの興味や得意分野に応じて、教えたり教えられたりする関係が自在にできるのだ。ホネホネ団の活動テーマである「みんなで、楽しく」の意味はここにある。

団員アンケートによると

では、当の団員たちはどんな考えを持って活動しているのだろうか。ある科学系イベントの出展にあたって2006年秋に行った「団員限定アンケート」の回答によると、ホネホネ団に参加してよかったこととしては『珍しい生き物に実際に触れられる／体の仕組み、骨のつくりの違いがわかる／作業の工程などいろいろなことを教わることが出来る』という標本づくりに対する満足感を挙げると同時に、『動物により詳しくなった／寄生虫などにも興味を持った／胃内容物を見て色々想像できる』と、解剖を通して得た新しい課題に興味をかきたてられている様子が分かる。

解剖はしようと思えば個人でもできるが、仲間とすればそれだけで楽しい。『以前から解剖に興味があって実現できる場所にめぐりあえた／幅広い年齢層と色々な話ができる／友だちがふえた／変わり者がいっぱい／話題に事欠かない』といった場と仲間づくりの楽しさを挙げた人が多い理由はそれだろう。

はじめて動物の解剖をする時には、好奇心とともに“私は大事な死体をいじり回しているだけかも”という不安を感じることがある。それも、博物館に納める標本づくりでは少ないだろう。研究資料を作成し、野生動物の死を無駄にしないために動いている・・・そんな大義名分があることで、活動がしやすくなっているのかもしれない。『近所で死んでいる生き物を標本にできてよかった』『博物館の役割を再認識』という意見を見ると、この想像はあながち間違いでもなさそうだ。

他にも、『死体に対して、怖い・気持ち悪いなどの先入観がなくなった』という意見や、『道に色々な動物が落ちていることがわかった』など、ホネホネ団が普及教育の場になっているようすも見えてきた。

出すぎた“楽しい”杭になる

解剖というと眉をひそめる人はいても、子ども達と命のことを勉強しています・・・と表現すると、同じ事なのに世間の評判がまるで違ってくる。事実、ホネホネ団にはマスコミの取材も多い。

実は、「評判がいい」というのは参加者の子ども達にとってとても重要なことだ。骨を触ったり死体を拾ったりする以前に、生きものに興味を持ち、触ってみたい、どうなっているのか解剖して仕組みを

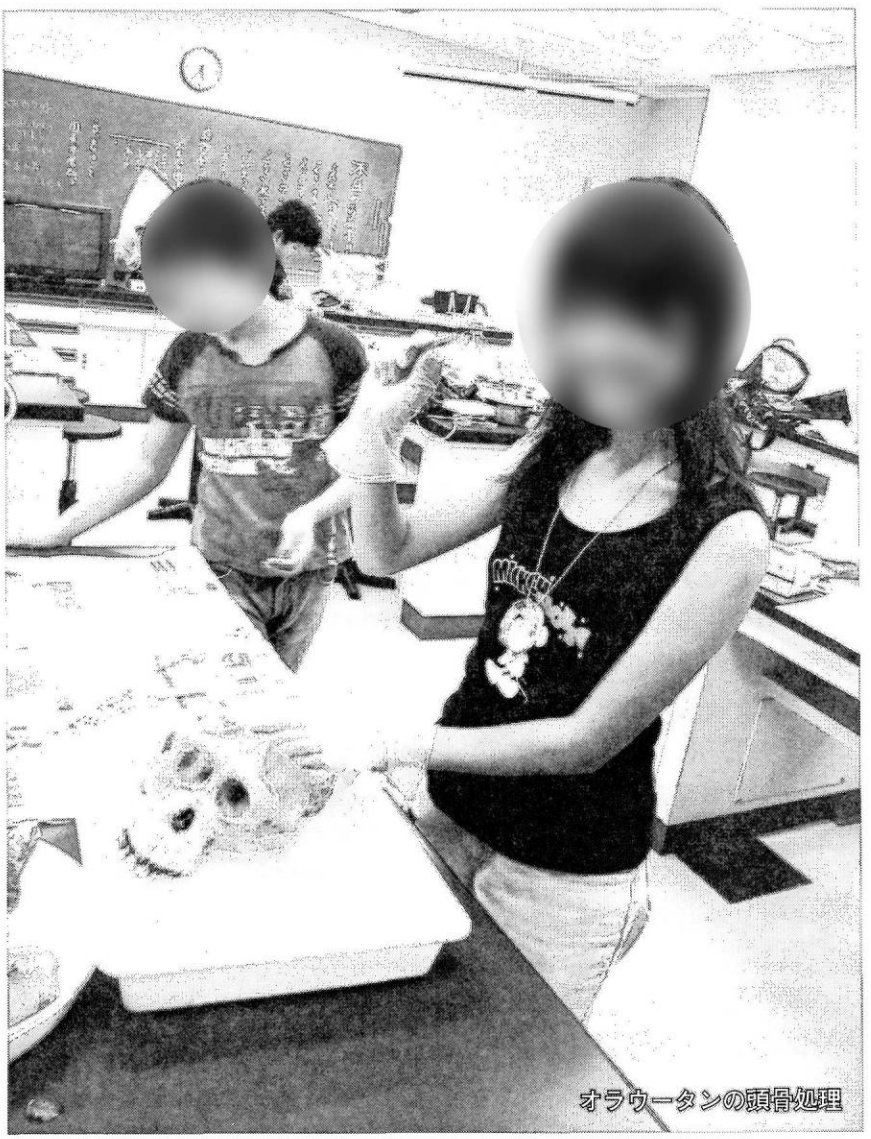
知りたいと考えるだけでも、学校や友だち、親から「変わり者」とか「残酷」と言われることもある。そういう困難をホネホネ団に来てまで背負わせるのは野暮というものだろう。生きものの体への自分の興味に従って、堂々と楽しく、きちんと経験を積む。身内より先に世の中に認められて有名になる。そのうちに学校の先生が評判を聞きつけ、団員である生徒に生きものについて質問をしてくるくらいにはなるのではないか、と考えている。

不安以上に得られる楽しさ

ところで、先日、数年前にうっかり参加してしまったあるキャンプのプログラムを思い出した。キャンプといいながら屋根も壁も床もある宿泊棟のベッドに泊まり、「キャンプファイヤー」は事前に組まれた木に灯油をかけて燃やすだけ。目玉のプログラムに自分で鶏を1羽料理、とあったが、用意されたのは内蔵もすっかり抜かれた冷凍の鶏。自分でしめて、羽をむしって解体し、内蔵をぬいて調理するわけではないと知ってがっかりしたものだ。この例に漏れず、子どもたちが直接生きものや自然と触れあう機会は近年ますます減っている。事故が起きたら、苦情が来たら困るからという理由で、自分で工夫し・自分の手で道具を使って・生きものと接触する、そんな体験を持ちにくくなっている状況は、あまりにもったいないように思う。

もちろん、解剖がどんなに子どもたちの興味をひく取り組みだとしても、実際にその機会を作るには不安な材料も多いだろう。安全面(*1)や衛生面のことなど、野生動物に接触するリスク(*2)を無視するわけにはいかないが、何も起きないようにお膳立てされたプログラムでは、結局のところ、作業に伴う道具の扱いだけでなく、野生動物の死に向き合う際の心の葛藤、といった精神的な体験も得られないのではないだろうか。

私はホネホネ団の経験から、異なる世代と共に活動するおもしろさ、まずはやってみることで開ける可能性、標本製作の技術に年齢の違いはないこと、「解剖」は生きものに興味を持たせる強烈なツールである確信を得た。事故を恐れて経験から人を遠ざけるよりも、必要なところはフォローしながら、これからも解剖を通して団員と一緒に楽しく生きものの不思議に遊んでみたい。


オラウータンの頭骨処理

＊1　けがや事故などに対しては、必要に応じ、民間の保険に加入して対応している。

＊2　ホネホネ団では、白衣などの作業着と手袋マスクも用意している。不安がある人には解剖の無理強いはしない。特に死因が交通事故以外の動物や霊長類は子どもにはさせない。

鹿いじめ悪童記

匿名　さん

我らが桜寮は、奈良公園の一角とも言えそうな春日の森近くに位置しています。このロケーションでは、まず鹿との接触がないままに日々を送ることはできません。暮らしの友、共同生活のパートナーといっても決して過言ではありません。観光客が垣間見るような淡い感傷とは違った、同じテ　リトリーを有する生きもの同士ならではの確執は、甘っちょろいセンチメンタリズムを拒絶します。その愛憎劇の披露も、益のないことではないと信じています。
ただし、20年以上前の話ということをご承知おき下さい。

寮生の悲劇・寮生の過激

夏の暑い時期には、誰もが窓を開け放ち、涼風を呼び込もうと工夫することでしょう。木造二階建ての古風なたたずまいの我が桜寮には、もとよりクーラーなどの施設などあるはずもなく、寮生はひたすら吹き抜ける風を待ちつつ、汗ばむ膚に団扇で風を送って涼を得るのが常でありました。本来なら窓に虫除けの網戸があるはずなのですが、これがあると風の通りが悪くなるのは当然のこと。風を取るか、対害虫防御を取るかとの選択で、躊躇する寮生はあまり多くいません。しごく当然のこととして網戸をはずしてしまいます。もっとも端から網戸をなくしてしまって、つけるにつけられない寮生の方が多かったかもしれません。ところが、一階に居住する寮生の間には、代々受け継がれている掟があります。それは、網戸をはずすな。さもなくば、窓際に大事な物を置くな・・・と。

この言葉の真の意味を実体験した寮生が、歴代何人もいたことでしょう。例えば、朝起きて机を見ると、前夜必至に書き上げた課題のレポートが、見るも無惨に破れて散在していたとか。窓際の壁に貼り付けていた彼女の写真が、粘性を帯びた液体で全面を覆われていたとか・・・。このよだれの犯人が、あの観光客相手には愛嬌を振りまいて、恥じることを知らない鹿たちなのです。こうした寮生の悲劇に理解ある大学の諸先生方は、快く寮生のレポート提出期限延長を認めてくれたものでした。そのまま、卒業延期までを認めるお達しが教授から発せられて、慌てふためく寮生も多かったのですが・・・。

クーラー：扇風機のある部屋は幾つかあった。こは、集い部屋になっていた。
対害虫防御：一度、日本脳炎の発生を報じるニュース　が流れ、この時はさながら我慢大会の様相を呈していた。

ある時、電話室で新聞を読んでいると、傍らからムシャムシャという音が聞こえてきました。まるで、紙を食べているヤギさんのようだなぁと思って顔を上げると、そこいたのは、ヤギさんじゃなくて新聞を広げた鹿さんでした。孟母三遷の謂いもあるが、いくら学生寮の鹿だからといって新聞を読んでいるわけもなく、あごを左右にずらすようにしながら新聞紙を食べていました。この時、私はびっくりしてしまって、とっさに後ずさってしまったので、鹿も後ろっ跳びに驚きのまなこをかっと見開きました。まだ修行が足りなかった自分を、今でも後悔しています。彼（雄じかだった）は、私には少しも驚いてはいなかったのです。（何せ、私は最初からそこにいて、彼はそれを承知で近くにやって来たのだ！）彼の驚きの対象は、私の驚愕後ろ三段跳びだったのです。「なんだ、寮生にはまだ、俺達を見て驚くような柔な奴が居たんだ・・・」と彼の心には寂しさや侮りの気持ちがわきおこったことでしょう。ああ口惜しい！　（再度確認しておきますが、最初に書いたように場所は電話室です。彼との対面は、人気のない昼間の寮内だったのです）。鹿が紙を食べるのは、こうして実証されました。寮生は、鹿に食べられる前に新聞を読むことを要求されていたわけです。

自分が読む前に新聞を食べられてしまったのでしょうか、ある寮生が新聞紙の切れ端をくわえた鹿に、果敢に挑んでいたことがありました。彼は（これは

寮生のことです)、明白な敵意をむき出しにして鹿と対峙し、おもむろにポケットからライターを取り出し、その新聞紙の先に火を点けました。その時点で鹿は何の反応も示しませんでした。火は静かに燃ていきます。目の前で揺らぐ炎にも頓着するようすも見せず彼は（これは鹿のことです）あごを左右にずらすようにして新聞紙を噛み続けています。獣は火を恐れると教わったのに、現実は生物学を凌駕していました。火が燃え進んだからか、自分で噛み進めたからか、当然炎は彼の眼前にまで達しました。すると鹿は、ちょうどエビが反り返らせた体をバネのように弾かせるようにぽーんと後ろに飛び上がりました。着地と同時に紙を離した鹿でした。彼が（鹿のことです）その後どうするのか、を何人かの寮生が凝視していたのですが、再び別の新聞紙を噛み始めました。あっけない結末でした。彼が（寮生のことです）執着していた新聞紙は、そのまま餌食になり、お土産のように鹿が残していった丸い糞が、寮の中庭に散らばっていました。

私たちが何かを獲得したとすれば、それは「鹿は新聞紙をウェルダンで焼くより、レアの方を好む」という新知識だけだったわけです。

孟母三遷：門前の小僧習わぬ経を読む、とは意味がちょっと違うが、ここでは無理矢理使ってみた。

時として過激な振る舞いを見せる寮生の中でも、ひときわ群を抜く猛者がいました。仮にT君としましょう。このT君は、ことのほか鹿と敵対する関係を持ちたがりました。私生活上の（この意味のほとんどは彼女とのことと解釈して差し支えない）うっぷんを、鹿に向けていたのかもしれません。下級生に向けてうっぷんばらしをする道を選ばなかったのは、人類愛だったのかもしれません。（ここでは、動物愛などという概念は扱っていません）。彼の蛮勇は、掃除のモップを手にして鹿に挑む、あるいはスリッパを投げつける、ひいてはバイクで追い回す、などといった行動に体現されていました。その行動を見て快哉を叫ぶ寮生もいましたし、たしなめる寮生もいました。寮生にとっても、人生と同じように、鹿による悲劇は決して一様に襲いかかってくるわけではないからです。ある時から急に鹿をいじめ出す輩もいましたし、逆に昨日まで追い回していた奴が別

20年前は子シカが隠れる程草が茂っていた

な寮生の行動を諌めたりもしました。そうです、このようにして私たち寮生は、人生の何たるかを鹿たちに教えてもらっていたのです。

バイク：突然のブームで、一度に増えた。すぐに車も増えた。

もっとも鹿たちも、黙ってはいません。いや、たいがいは黙ったままですが、モグモグと草や葉っぱを食べて、たくさんの糞を撒いていきました。買い物から帰ったばかりで、まだ口も開けていない箱を、ちょっとの隙に破られて大事なチョコボールを食べられ、代わりに同じようなチョコ色のボールが残っている惨状に涙した寮生もいました。でも、親子の鹿は仲むつまじく、バンビのかわいさは格別です。哀惜を伴ったような鹿の鳴き声に、秋の夜長を瞑想に費やすこともできました。たくさんの喜びを与えてくれるのも鹿たちだったのです。他のどんな大学の寮生活でも味わえないような生活を、鹿たちと共に過ごすことができる、それが桜寮なのです。

では、どうして、そんな虐待にも似た扱いが為される桜寮なのに 鹿たちは凝りもせずにやって来るのでしょうか？この疑問に対しても、我ら桜寮生は真理追究に努めました・・。

鹿の生態・寮生の包帯

奈良を訪れたことのある方なら、奈良公園周辺に立てられている立て札をご覧になったことがきっとおありでしょう。そこにはこんな風な警告文が、したためられています。「ただ今、鹿は発情期に入っています。おとなしい鹿でも、この時期は気が荒くなっていて人に危害を加える場合もあります。充分にご注意ください。子ども連れの母鹿には、特に注意が必要です・・・」。実際に、鹿のアタックを受けて怪我をしてしまう例もあるので、確かに注意を怠ることはできません。電池で動くおもちゃではない「生き物」であることを忘れてはいけません。スイッチを切れば大丈夫、とかSGマークなどといったものもあるわけないのです。ところで、この立て札、いつも目にすることができます。立てられたままなのか、それともいつも発情期にあるのが奈良の鹿の特徴なのか？もし、後者なら、人間に次いで奈良の鹿も本能を凌駕する文化を手に入れているのかもしれない？とにもかくにも、鹿は奈良を訪れる観光客にとってのアイドルです。でも、そのアイドルがお客さんに危害を加えてはいけないので、鹿にはきつく言い聞かせておくべきなのですが、さすがに鹿語を解する人間もいなければ、人語を解する鹿もいない（たぶんそうであろう。まだ発見されていないかも？）ので、仕方なくお客さんに自衛策を要請しているわけです（しかも、発情期が終わった時点で、すぐに次回の発情期のために予め注意を喚起する周到さで！）。そうであっても、観光客は鹿にあの鹿煎餅を与え、ひとときの心の交流を楽しむのです。もちろん、寮生もこうした交流を拒むものではありません。いやむしろ生活のパートナーとしてもっと濃密な交流があるのです。ある時、こんな会話が寮室で交わされました。

「どうして観光スポットで見る鹿たちは、人を見ると近寄って来て愛嬌を振りまくのに、寮で見る鹿たちは、そうしないのか？」この疑問自体は、何気ない会話の中の産物でしたが、それが含む戦慄を呼ぶ根源的な内容に、その場に会した寮生一同は知る由もなかった・・・・！

東大寺や春日大社、奈良公園や興福寺、と奈良市内にはいくつもの観光スポットがあります。そしてそのいずれの場所も、鹿たちの行動範囲に入っています。そうした場所で出会う鹿たちは、確かに餌をねだるように「おじぎ」をくり返して観光客を喜ばせています。鹿煎餅をもっているかどうかに関わらずおじぎをくり返す様は、過激さを増すとちょっと脅迫じみてくるのではありますが。

SGマーク：Safety Goods（安全な製品）の略号で、（財）製品安全協会が定めたもの。製品の安全を保証し、欠陥による事故に対しての補償を約束している。
鹿煎餅：観光地にありがちなお土産とは違って、鹿の形をしている煎餅とか 鹿の味のする煎餅ではありません。鹿に与えるための物です。もちろん、お土産にできないわけではありませんが、他の地で利用できるかどうかは疑問です。材料は米糠などと聞いています。ある寮生が、空腹に耐えかねてかじったと聞きましたが、特に実害はなかったようです。また、別な寮生は、「ドッグフードはまずいが、キャットフードは

美味だ」と公言していました。この寮生は、自室に袋でキャットフードを買い込んでいたのですが、注意してほしいのは、彼はドッグフードが食べるのに適さないとは言っていない点です。もちろん、彼がそれらを主食にしていたわけではありません。念のため。 さらに付言すれば、私は付属幼稚園の宿直をアルバイトにしていた時、頼まれて兎の餌を与えに行き、思わずそれを口にしたことがあります。好奇心からのことでしたが、緑色の顆粒は種の垣根を厳然として知らしめる不味さであったことを報告しておきます。

当然、鹿の眼前の相手が我々寮生であっても、彼らはおじぎをします。そうだというのに、どうして寮で出会う鹿たちは、寮生におじぎをして近づいて来ないのか？仮説として提出されたのは、「鹿にはグループがあって、観光客慣れしている一群と、そうでないネイティブな一群があるのだ」というものでした。とするなら、寮で見る鹿たちは野生の血をたぎらせている勇ましい集団となるわけです。彼ら鹿たちの時に見せる戦闘的な身構えを思い出して、寮生一同は瞑目し頷きかけました。その時、別な寮生が、反論を提出しました。そんなことはないと言うのです。論旨は明解でした。桜寮のある場所は、前述したように春日山原始林との地続きです。万古に不動たる真心を求めて寂然と佇んできました。とするなら、彼らのねぐらである春日の山から町場に下って来るのに、鹿たちの行動範囲が寮の方向だけを特別なグループにだけ占領されているはずがない、というものです。これには一同がため息をつかされました。確かにそうです。どこで見る鹿も、同じような姿形で、特別に野性的な面立ちの鹿が寮内だけに出没しているわけではないのです。

万古に不動たる真心：桜寮寮歌「松籟繁く」の巻頭言（歌い出しの前口上）にある一節。「祖国大和誕生の地三笠の山懐に抱かれて　春日山原始林極るところ　寂然として佇む我が桜寮　万古に不動たる真心を求めん　確たる己を奏せん」との雄叫びに続き、「松籟繁く　夢は飛ぶ～♪」と歌唱が始まる。
野性的：奈良の鹿が、野生動物かどうかは議論の分かれるところ。実際に誰かが飼育している

北寮は平成4年、南寮は平成５年にとり壊されました。

わけではないが、かといって全くの放し飼いでもない。なにせ春日大社の縁起には神の使いとして登場する有名キャラクターである。「鹿愛護会」という団体が、ケアをしているのは、行政と宗教の関わり方を模索した結果の棲み分けなのかもしれない。

そうなると、別な仮説の構築が課題となりました。鹿たちに違いがないとなると、彼らが愛嬌を振りまく時とそうでない時があるのは、何が原因なのか？ある寮生は、時間じゃないかと言いました。つまり、観光客の多い昼の時間帯は、人に会うと餌をもらえることが多いから、鹿たちは愛想がいい。でも、朝や夕暮れ時、夜では、あまり餌をもらうことがないから無愛想になる。別な寮生が、「昼間にあった寮の中庭での格闘シーン」をみんなに思い出させて、その意見を言下に否定しました。では、場所ではないのか？という提案も出ました。寮の近辺は野犬が出ることもあるので、鹿たちも警戒しているのではないか？と。その提案には、寮の前を通り過ぎる観光客が、ひょいと出くわした鹿に近づくと、その鹿が実に愛想良くおじぎをくり返していた事実が突きつけられました。その鹿が、ちょっと前に寮生とにらみ合いを演じていたにも関わらずです。

そろそろ寮生達は、気づき始めていました。でも、誰一人としてその仮説を口にする勇気がありませんでした。かすかな望みを託すように、様々な理論構成をアクロバティックにひねり回しましたが、徒労に終わりつつありました。蛮勇をもって勇名を馳せていたＩ君が、宣言するように押し殺した声で断定しました。「鹿たちに違いがないとすれば、違いは人間の方にある。つまり、鹿を見て可愛がろうとする人間と、そうでない人間がいる。寮生は、後者に属することを鹿たちは峻別している」。完璧な論理に、居並ぶ寮生は声をなくしました。我々桜寮生は、鹿たちに選び抜かれていたのです。何となく気落ちしたような時間が流れました。しかし、その現実の受け入れを拒むような感傷主義は、真理を求めて桜寮に集う我々には無縁なものでした。その場の一同は、厳粛にその解釈を受けとめました。それは、鹿を可愛がらない野蛮な存在としての寮生を自覚するのではなく、鹿たちと共生する「生き物」としての寮生を自覚させるものです。ある意味で、鹿たちも寮生を自分達と渡り合うべき対等の存在として認めている、という確認でもありました。一座のみんなは、鹿たちの自分達寮生を見つめる視線を思い出し、また逆に自分達が鹿を見つめ返す眼差しを思い出していました。自分達に突きつけられた、鹿たちの冷厳な処遇に、痛み出した自分の心にそっと包帯を巻くようにして、三々五々その部屋を後にしていた寮生達の姿がありました。

奈良公園：寮のある高畑町から奈良市の中心街へは、循環バスが便利だが、お金を有効活用したい寮生は、よく歩き通した。途中のコースには、いくつか選択肢があり、奈良公園を突っ切るものや、元興寺近辺を　通り抜けるものなどがあった。元気のある時は何でもないが、奈良公園のアベックをかき分けて歩くには、気力が必要とされていた。

その一件があっての後日談です。奈良公園を横切って近鉄奈良駅まで行き来する際に、たくさんの鹿たちとすれ違います。その折りに、以前とは違った見方で鹿を眺めていた私は、ある時いつもと違った鹿の振る舞いに気づきました。それは、一度は餌をねだるように私に近づき、おじぎをくり返していた鹿が、ふっと何かに気づいたように動きを止めたことから始まりました。「ああ、こいつもしかしたら寮生だな。こんな所にまで来て何の用だ？また、わしらに悪さでもするつもりか？」とでも考えているような目つきでしたが、私は、ライバルを愛する余裕で見返したものです。そうすると、「ほう、そっちがそういうことなら、こっちも余裕で付き合ってやろう。お前も、ずいぶん成長したもんだなぁ」と見返してくれました。　私の足取りが軽やかになったのは、言うまでもありません。同じような体験をした寮生は、たくさんいたことでしょう。こうして桜寮生の日々は、鹿たちとの関わりのおかげで、より一層豊かで哲学的に展開していくのでした。

寮生と鹿たちのあれこれは、さまざまな感情を巻き起こすものばかりです。数え上げればきりがないとも言えるでしょう。それらを書き継いでいきたいとは思っていますが、読んでもらえているどうかが、エネルギー源です。感想はいかがでしょうか？

中国内蒙古調査紀行（Ⅱ）

鳥居　春己

前回の調査紀行から時間がたちましたが、中国内蒙古の調査紀行Part（Ⅱ）を紹介させていただきます。

8月14日（曇り後晴れ）

今日も朝食抜き。ついにダウン。午前中は王さんにトラップの見回りをお願いして、全員休息。コクセンケアシネズミ2頭、ジリス3頭の成果。午後は、日本隊と王さんは植物調査にでかけたが、俺だけ解剖と休息。

植物隊は目的とした柵がみつからず、2時頃帰って来る。植物隊も午後は標本の整理にかかる。モンゴリアンガゼルの解剖のためザーレンノーラに残ったジャンさんとリーさんが4時半頃合流する。そのまま夕食へ。

夜、スーさんが医者の奥さんを連れてきてくれる。高槻さんともども受診するが、二人とも風邪と疲れのために注射ということになってしまった。筋注なのだが、肩と尻とどちらが痛いかと聞くと、肩だというので尻にすることになる。最初に高槻さんが受けることになったが、奥さんは尻というよりは腰の下のあたりを左手で押さえて、針を打つ場所を探しているように見えた。そして、右手の注射器はダーツの矢を持つようなスタイルなのだが、なんとそのままダーツを撃つような注射をうってしまったのである。的が近いから注射器が手から離れているとは思えないが、まるで投げたかのように見えたのだ。驚きはそれだけではなかった。高槻さんいわく「終わったの？」。なんと注射を終えたのを高槻さんは気がつかなかったのである。次に俺の番だったのだが、高槻さんの説明だと俺が彼の治療を見ていたのと同じ光景だったらしい。針を刺されたのを感じないのである。多分、ツボに刺していたのだと思う（後日、本人に尋ねて確認した）。

8月15日（曇り後晴れ）

朝食後にスーさんが奥さんを連れてきてくれた。昨晩は右の尻にうったので今日は左にした。今日も的に一発で入ったらしくまったく痛さを感じない。

王さんとネズミの回収に出かけ、木場チャンも同行。軽牧区ではジリスを回収し、木場チャンを残して重牧区へ移動。しかし、なんということか34個ものトラップがなくなっているではないか。これでは調査にならないので、トラップを回収し、別の調査地を探そうということになり、2列ほど回収したところで、ケアシネズミが捕獲されているのを確認する。捕獲地を変える決心をしていたのに、捕獲されたとたんに決心がにぶった。ひょっとすると所在不明のトラップに何かかかっていたのではないだろうか。朝令暮改どころではない、数分で変更。すぐにトラップをもとに戻して、王さんにホテルへトラップを取りに帰ってもらうことになった。しかし、トラップサイトのそばには人家（ゲル）があるが、どう考えてもそこの住人に何か聞いてみなければならないような気がしてきた。しかし、それを察してか王さんが折衝にでかける。しばらくして帰ってくるが、そこでは成果はなかったらしい。王さんにトラップをとりに戻り、ついでに木場チャンの回収をお願いする。トラップ設置後は巣穴調査を続ける。この調査はフーさんにも手伝ってもらうが、なんとなく彼は王さんを避けているようで、すぐに王さんから離れてしまい、なかなか仕事がはかどらない。王さんがしょっちゅう「フーッ、フーッ」と大声でどなっていた。数日前に皆の前で怒られたのが彼には気にいらなかったのだろうか。数年前にボルネオ島での調査で、京大の東さんにプライドを傷つけるので絶対に現地の人間は人前では怒るなと注意されたことを思い出す。

夜、3度目の注射、左右1回づつうっているので、今日はもとに戻って右にする。針が刺されている間は痛くなかったのだが、終わって薬が尻に広がってとたんに痛くなってきた。痛さでという訳ではないが、その夜は眠れなかった。3時に窓の外を見ると満天の星、地平線が低いのでそれだけ空が広く、沢山の星になる。

8月16日（曇り後晴れ）

内蒙古草原最後の日である。最後の最後に最高の天気である。撤退のためのダンボールの買い出しなどで例のごとく出発が遅れる。センタオラで軽牧区でジリス2頭、ケアシネズミ3頭の成果である。昼食後に重牧区で生きたままのジリスを回収。昨日の交渉が功を奏したのか、紛失トラップはゼロである。ホテルで解剖と昨日までに解剖していた個体のパッキングを終えた頃に植物隊が帰宅する。

スーさんと運チャンとは最後の晩になるため、夕食後店を変えて宴会となる。王さんもスーさんも今日はビールはなしで、最初から酒を飲む。皆陽気になり、スーさんのモンゴルの唄でスタートすると、ジャンさんが続く。リーさんもフーさんも堂々と挨拶し、乾杯しているが、俺の研究室の学生を連れてきてもこれだけ人前で挨拶できるだろうかと思いつつ聞いていた。思い思いの挨拶と乾杯に、終わりづつらくなるも8時40分にホテルへ戻る。そこでも別れがたく挨拶の連続、二人が帰ったのは9時をまわる。

8月17日（曇り）

5時半起床。朝はカップヌードルの予定でいて、湯は用意してあったものの、ヌードルそのものが4個しかなかった。それでも昨夜までの間食の残りを探してなんとか朝食を済ませる。バスは予定通り6時半にスタートする。クッションも良好で、走りも順調、窓辺ではナベヅルも姿を見せるが、それも1時間でストップ。パンクである。パンク修理が終われば順調に走って9時には満州里へ到着。

バスを乗り換え、20分で改めて出発。遠くにロシアの街並みを見ることができた。バスの周囲に、見覚えのある曲がりくねった川のある景色が見えてくる。そう、北京からの飛行機の窓から見たハイラルの景色である。午後にはホテルへ入り、ゆっくり眠る。

夕方、ジャンさんの後輩（リンさん）を交えて夕食。その後、久しぶりの入浴で風呂は垢だらけだった。

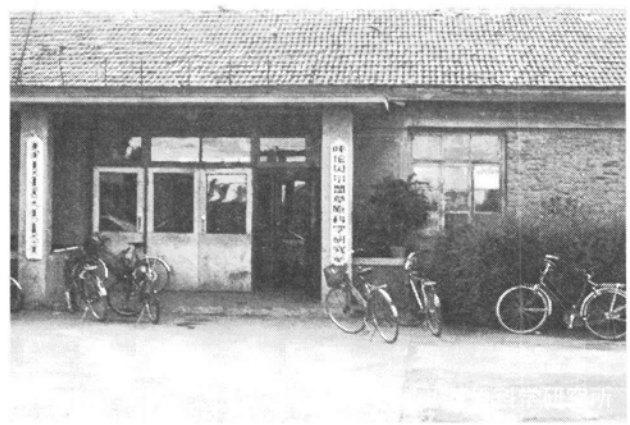
8月18日（曇り）

5時半、向かいの部屋のノックに起こされる。8時頃からの朝食の後で、ジャンさんは本探し、王さんはハルピン行き夜行列車のチケット確保にでかける。残りは植物標本の同定依に頼畜牧局へショウ副所長に面会に出かける。そこでは、ネズミ類の標本を見せてもらう予定でいたのだが、まともな標本は残っていなかった。また、昨年まで大発生していたというハタネズミの捕獲記録もみることができなかった。同定終了後に畜牧局近くのレストランへ昼食にでかけるが、雨上がりのぬかるみがひどい。しかし、なんとそこには冷えた生ビールがあるではないか。

畜牧局を出て、本（ホロンバイルの噛歯類）を探して数軒の本屋を覗くがみつからずに、あきらめ。4時にはホテルに戻って、5時40分まで後片付けに専念する。6時にハイラル駅へ到着する。30分、待たされて車内へ乗り込み。ただし、9人に確保されたチケットは3枚のみであった。乗るのは9号の寝台車。車両ごとに車掌がいて、チケットを見せて乗り込み、窓からジャンさんに手渡して、ジャンさんが乗ってくる。次は王さん。6時52分、定刻通りにゆっくりと汽車が動き出す。今日は満月だ。皆、適当に荷物を棚に乗せて、落ち着くが、王さんはチケットの確保に走り回っている。やがて王さんが13号車に席を確保したとのことで、王さんや木場チャン達が後ろの車両へ消えて行く。車掌が回ってきて、チケットと座席の指定券を交換してゆくが、ケースに入ったりっぱなもので、翌朝回収された。

8時過ぎに落ちついたところで、夕食に食堂車へ移動。食堂はバンケット方式だが、煮物が多く、肉類は少ない。相変わらずビールはぬるい。

自分の席に戻って、外を眺める。大興安嶺のあたりを走っているはずと思うが、寄れなかったのが残念であった。もっとも、風邪でダウンして、夜の観察にも出られなかったのだから仕方ないか。



8月19日（曇り）

5時、トイレに起きる。やはり汚れたトイレだ。外はトウモロコシ畑が続く。5時50分に王さんが起こしに来た。6時頃に到着のはずだというが、着いたのは25分だった。ハルピンはさすがに300万人の大都会である。高さんらが出迎えてくれた。荷物は学生がさっさと運んでくれた。東北林業大学のゲストハウスへ荷物をおいて大学招待所で朝食を取る。その後、ゲストハウスへ戻り、洗濯のあとで朝寝。そのまま寝込むがゲストハウス食堂から昼食の知らせ（11時半）。料理のメニューは同じようだが味付けが薄く、内蒙古での油料理に疲れた胃に具合が良い。木場チャンが標本の乾燥から戻って来る。彼は昼食を期待していなかった上に、ご飯付きに感激の様子。

昼食後ジャンさんらと林業大学へでかけ、標本室を見学するが、ハタネズミは見つからない。その後、ジャンさん、王さんらとハルピン動物園へ。動物園の職員には二人の友人が多く、顔の広いのには驚かされる。この動物園はイギリスあたりの動物愛護団体が視察にきたら、どんなトラブルになるだろうというようなお粗末な飼育、展示だった。恐ろしい展示もあった。日覆いのない狭いケージにヒョウを押し込め、ヒョウは暑さにあえいでいた。そのケージも歩道のすぐ脇に置いてあるだけで、なんと手を伸ばせばヒョウに触れるのである。ヒョウだけでなく、タヌキその他も同様。また、ハクビシンのケージを探したが、そこにいたのはタヌキだった。

夕食は招待所での歓迎会である。馬さん、高さん、ジンボさん、アンナ（ロシア）らを交えての酒宴だった。中国式の乾杯を警戒していたのではあるが、それほどではなかったので助かった。

8月20日（晴れ）

今日も電話で朝食ＯＫのコール。コーヒーにパンという朝食がありがたい。食後は昨日同じで洗濯と朝寝。昼食では、モウコガゼルの打ち合わせに来たモンゴルのラクバズーレン氏（以後はラクさん）、アンナが加わり、それにスウエーデンの旅行者が一緒になった。午後は伊藤さん、木場チャンは王さんと植物標本の発送のために郵便局へでかけるとのことであったが、王さんが姿を見せないので二人ででかける。王さんへの連絡係りの留守番を兼ねて、ネズミ、ジリスなどの標本のアルコール抜きの作業で過ごす。途中、リンさんが木場チャンを探して顔を見せるが、要を得ない。どうも王さんから木場チャンに何か連絡を頼まれたらしいのだが、本人がいないので俺には何も言わないでいたらしい。皆が顔を合わせた時に王さんに待っていたのにというと、王さんとリンさんの間に多少のトラブルがあった。

夜はラクさんも一緒に宴会。高さんとラクさんと俺で、なんとなく International Nonbe という言葉ができてしまった。高さんも離れた席から巻き舌で「トリイイー、乾杯」とくる。そうこうするうちに、卡拉OK（カラオケ）が始まった。世界10大歌曲なるものが流れてきた。日本と中国とロシアで世界だということで、日本からはご存じ「北国の春」、「四季の歌」ともう1曲あったが思い出せない。中国は共産党歌と「夜来香」と後は不明、ロシアからは「カチューシャ」と他は忘れた。「カチューシャ」は「カチューシャ可愛や、別れの辛さ・・・」ではなくて、「リンゴの花ほころび・・・・」だ。ところが、アンナがロシア民謡を知らないのだ。彼女の出身がどこだかわからないが、この曲が日本ほど有名ではないのかもしれない。今度行くチャンスがあったら「夜来香」か「何日君帰」を中国語で歌えるようにしておくかと思う。しかし、外国でいつも思うことは「英語頑張るぞ」だが、帰国するとそんなことはすっかり忘れてしまう。

8月21日（雨）

腹の具合が悪い。下痢で4時と6時に目を覚ます。ハイラルからの下痢気味の腹がハルピンですっかり直っていたのに、歓迎会がきいてしまったのだろうか。朝から大雨。今日はついていない日らしい。

朝食後、林業大学で王さんと会って、木場チャンらの植物標本を郵便局での発送につきあう。その後、デパートでネズミ梱包用のタッパー様の容器とガムテープを購入するが、松川さん（奈良教育大学　国語教育）から頼まれた馬頭琴は大雨で探すのをあきらめ。かみさん達への土産物も放棄することにした。

ゲストハウスへもどるとジャンさんが待っていて、昼食時に資源研究所の歓迎会へ出かける。黒龍江省科学院委員長の呉さんや同副委員長芥さんなど研究所のお偉方が揃い、研究所から高槻さんへ調査協力などから感謝状が送られた。ジャンさんに対する研究所の期待の大きさを伺がい知ることができた。資

日本語ができ、大柄で、髭面で良くしゃべる、見るからに呑んべという感。どこかで会ったことがあるような気がするが、日本人にも似た風貌、雰囲気のせいだろうか。日本酒は新潟で鍛えてきたと大笑いしていた。数年振りにペキンダックを食する。2時間くらいでゲストハウスに戻るが、昼間の酒はきくーっ!!!!

ところが、夕食は林業大学が宴会を催してくれたのである。さすがに、高さんもラクさんも酒が進まない。

8月22日（曇り）

今日は北京への移動日である。高さんが送ってくれて9時20分に空港へ到着する。王さんやリーさん、高さんらと別れの挨拶をかわし、別れたもののすべての飛行機が遅れているという。それでも1機が離陸して行った。今日はラクさんと俺は皆とは別のフライトである。11時40分、高槻さん達先発隊が出発ロビーへ消えて行く。ところが、時々2階のロビーに木場チャンの姿が見える。そのうちに手を振ったりもしている。1時半、どうやらマシントラブルでフライトはいつになるかわからないという。伊藤さんやジャンさんの姿も時々見える。2時10分、高槻さん達のフライトは5時30分になるという。どういう訳か俺達のフライトは未定である。朝からハルピン空港を離陸した飛行機はわずか1機、到着機はゼロである。インフォメーションに行って到着機が離陸機になるのだから、到着しなければ離陸できないということがわかった。しかし、なぜ到着しないかは何も知らされていないのである。そのうちに、到着機が滑走路をはずれて故障して止ったままということがわかった。その機が移動できれば良いのだがいつになるかわからないということらしい。

退屈でやることがない。時々外へ出て、奇麗な空気を吸うくらいしかない。それと周りの女の子を眺めるくらいか。二人の前に派手なブラウスの、色白の二十くらいの女の子がいる。今日のミスハルピン空港ではないかと思うと言うとラクバも同意。ラクバによると彼女はモンゴル系だという。あの子もモンゴル、あの子モンゴルと言うが良く見るとかわいい子は皆モンゴル系だと言っているようだ。そのことを告げると、モンゴルの子は皆奇麗なのだから当然だ、今度はモンゴルに来て、自分で確かめろという。聞いてられない。女の子はかわいいが男は・・・・・・と言ってやろうか。

待たされる客も次第にイライラがつのってきたのだろう。口論が始まった。最初は、空気を吸いに出た表で目撃したので、あまり詳しいことはわからない。しかし、次は我々の目の前で起きたのである、それも女性同士だ。飛行機待ちの人数には不十分のベンチの数で、その席の取り合いのトラブルだった。子どもを抱いたおっかさん（敢えてそう呼ばせていただく）がほんのちょっとのあいだ席を立って荷物を移動したスキに脇で立っていた男性が座ってしまったのだ。おっかさんは烈火のごとく怒って、まくしたてている。中国語はわからないが、多分「そこは私が座っていた席で、荷物を動かすのに席を一時あけただけだ」とでも言っているのだろう。ところが、それに反論したのは、その男性ではなく、その奥さん（多分）なのだ。これも想像だが、「どんな理由

にしろ、立ったらそれでその席は放棄したとみなされるのだ、それがいやならベンチを持って動け」くらいのことを言っていたのだろう。男性は腕組みしたままで、その頭の上で二人の女性がまくしたてて

いる。回りは面白がって、手をたたいている者さえいる。そのうちに、おっかさんは、抱いていた子どもをその男性に無理に抱かせてしまった。「この席はこの子のためにとったものだから、そこに座るならその子を抱いていろ」、多分こうだろう。男性は黙って抱いている。相変わらず二人の女性は口論。そのうちに、2～3席離れた席の老人が席を譲ろうとおっかさんの手を引いて、自分の席に座らせようとするが、がんとしてうけつけない。最終的には、おっかさんは自分の子を抱いて、男性をにらみつけながら、その脇に立つということになった。リーさん達の挨拶といい、おっかさんの弁舌といい、中国人は自分の言うことをはっきり言うものだ。見習わなければならないと、反省。

6時過ぎに夕食が用意された。レストランで各自が勝手に食事をとるシステムになっている。その光景がすさまじい。砂糖に群がる蟻のように惣菜の入った棚に群がり、発砲スチロール容器にこぼれるまで惣菜を詰め込んでいる。横からどんどん頭を突っ込んできて他人のことはおかまいなしに盛り付けている姿はみたくない光景である。列を作って並ぶという習慣がまったくないのではないかと思う。あきれて見ているとウエイトレスの女の子と目があると彼女は仕方ないというように肩をすぼめて見せた。その光景をおかしいと見る中国の子がいるのを知って安心する。ラクバと二人、食事を外へ持って出て、ブロックに座って食べる。

7時半に空港閉鎖がアナウンスされる。しかし、なぜかは言わなかった。それから1時間して先発隊がロビーからでてくる。今日のホテルはフライトごとなので二つに別れることになるので、インフォメーションで同じ所にしてくれと頼むがだめであった。空港差し回しのバスは込んでいるし、いつでるのかわからない。タクシーということになったが、ジャンさんが交渉するも吹っ掛けられた。結局、値切った末にタクシーでホテルへ。空港へ着いたのが午前9時20分、出たのが9時10分だからほぼ12時間、空港で座り込んでいたのである。

ホテルで、部屋に入り落ち着いたところでどちらからともなくビールはどうかという話しになった。フロントでどこかでビールが飲みたいと聞くが、レストランはとっくに閉まっている。ならば、外へ。結論はすぐに出る。ホテルの前の路地を少し入ると数軒の店が開いている。即、冷えたビール。かあーっ、旨い。水餃子を頼む。適当に切り上げて帰るが、ラクバが途中で店へ戻って行った。忘れ物かと思っていたが、ビールを2本抱えてきた。ホテルの階のキー係りを口説こうと言う。二人で口説くが言葉が通じない。キーを開けに来てはくれたが体よくあしらわれてしまった。敵はおじさんの相手は得意のようだ。二人が風呂から出て、ビールを飲んで電気を消したのは11時59分だった。

昼間にジャンさんが23日の北京・関空間のキャンセルの電話を入れてくれるが、ハルピンの全日空の事務所でなければ話しはできないということであった。

8月23日（晴れ）

朝から晴天、暑い。ラクバは朝食にでかけたが、俺は寝ていた。彼が水餃子みたいなのを持ってきてくれた。感謝。二人ともしばらくベットに入ったまま、時々起きて外の景色を写真に撮る。下は大きな通りだが、どこでも好きな所で道路を横切る通行人の姿が見える。向かいのアパートの窓辺には沢山の鳥篭が並ぶ。ラクさんは22日に北京で奥さんと会う約束していたが連絡がとれないので、東北林業大学のジンボさんに電話して、北京で奥さんが泊っていると思われるホテルへコンタクトを頼んだ。

その後、様子伺いに10時に高槻さんのホテルへ。昼食はそのホテルでとったが、よいのだろうか。昼食後、帰って昼寝。ラクバは再度ジンボさんに連絡するとなんとか奥さんの所在が確認できたという。

5時過ぎにラクバに夕食だと起こされる。食事から帰って、二人でキー係りと会話。この馬鹿おやじはさっき奥さんと連絡が取れたばかりなのにと思ったが・・・・・。キー係りの子、可愛い、本当に可愛い。モンゴルへ行っても、やはり可愛いだろうというのはラクバも同意した。取り敢えずシェンミン（Zhengmin）という名前は聞き出すことができた。ところが彼女の電話番号が聞き出せない。なんとかホテルの番号と彼女のデスクの番号までは聞き出せたのだが。紙にホテルの絵を書き、デスクの電話の絵を書く、それに聞き出したデスクの番号を書いて、ホテルから帰るシェンミンと自宅らしき家の絵を書いて、自宅の中に電話機を書いて、その番号を聞くという作業でやっと聞き出した。とは言って電話できる訳でもな

いのに。

彼女の電話番号はわかった、次は休日だ。明日も飛行機が飛ばなければ、ハルピンを案内してくれと、誘おうとしたのだが、休日というそんな抽象的なことは絵にならないので、あきらめて部屋に戻る。

しばらくすると、ラクバが戻ってきて、空港へ行くバスが出るという電話が入ったから早く着替えろという。あわただしくバスに乗り込むが、出発便の遅い人は折角乗ったものの、降ろされてしまった。7時15分に空港到着。雑踏の中で、ジャンさんがなんとか便を探してくれる。もともと、乗るべき便はなくなっているのだから別の便にもぐりこむのだが、こちらは前に乗ることになっていた便ごとに搭乗すると思っているから呑気で、怒られた。乗れる便があれば、どんどん乗り込まないといつ帰れるかわからないという。危機管理の良い経験であった。9時30分に飛行機に乗り込んで、11時5分北京着。とりあえず航空会社さしまわしのホテルへ。北京は霧が深いのか、それともスモッグか。

8月24日（晴れ）

とりあえず朝食を済ませて、空港へ。持っている航空券は昨日のもので、今日使えるあてはない。ジャンさんがフロントへいってくれるがまだ誰も来ていない。やっと職員が姿を見せるがチケットはキャンセルがあれば良いが、駄目だった場合は別便のチケットを新たに購入するしかなく、それもビジネスクラスしか空席はないという。キャンセルがなかった場合に別の便を探していたのでは帰れなくなるというので、対応策として、全日空をジャンさんが確保してくれていた。高槻さんには明日は大学院の試験があるという。結局キャンセルはなく全日空になる。帰りは二重払いになってしまった。

キャンセル待ちの間、交代で荷物番をしながら食事をとる。食後、床に座って時間待ちをしながら回りを眺める。少し離れた所に、黄色のワンピースの中国女性。スーツケースに座るミニスカート。ラクバがいれば、彼女もモンゴリアンというだろう。彼は今頃、奥さんと再会しているのだから、他の女性には目を向けていないのだろう。そんなこともないか。そのうちに午後のなってしまった。今日は24日、そう言えば学会で数学の神保さんが北京に着く頃である。到着ロビーへ行ったら会えるかもしれないが、やっと、出発ロビーへ入ることになった。ロビーで慌ただしく土産を買いあさり、チェックへ移動。やっと北京を離れることになった。北京には丸1日いたことになるのに、結局観光はなしか。

後は順調。夜10時近くに研究室へ戻る。メイルとファックス、留守電が一杯来ているが、読むのは明日にして、帰って風呂に入ろう。と思ったが、つい大吉（自宅までの途中の行きつけの飲み屋）へ寄ってしまった。機内で冷えたビールを飲んだのに、またまた冷えたビールである。1ケ月間にわずかしか飲めなかった冷えたビールの元を取り戻すつもりで、飲みだしたが一人ではメートルが上がらず、すぐに帰る。

中国トイレ事情

中国に行く前に聞いていたのは、トイレの汚さとトイレに仕切りがないという話である。そんな話がまことしやかに伝えられているが、それを確認するのも楽しみの一つであった。また、周囲360度見渡す限りの草原でのトイレというのも経験したいと思っていた。確かに中国のトイレは汚なかった。そのためのエピソードには事欠かなかった。北京では到着後すぐにタクシーでホテルに入り、翌日はタクシーで空港入りし、そのままハイラルまで飛んだために、空港のトイレ状況は不明（後日利用しているので、後述しよう）。

北京のホテルは観光客めあてのホテルであったから、普段から利用しているホテルと何ら変わることはなかった。ところが、ハイラルの宿泊所から、事情は一変した。宿はハイラルの南に位置する南屯の宿泊所である。その部屋にはトイレと風呂・洗面所付きであるが、風呂には水が流れるものの、湯はでない。トイレは洋式だが、水は流れない。そのため、風呂はトイレ用の水槽にしか使えず、使うたびに洗面器で水を汲んで、流していた。風呂から汲み上げる時に床に水が零れるし、便器を流す時にも同じで、床はいつも水浸しである。こんな調子だから当然トイレットペーパーはない。

この状況は次の宿泊所でもあまり改善されなかった。トイレに水は流れたのだが、風呂に湯が出ないことは同じである。それでも、風呂の水を汲まなくて良いだけはましで、床が濡れることはなかったのである。ただし、トイレットペーパーがないのは当然。

この状況は次の宿泊所でもあまり改善されなかった。トイレに水は流れたのだが、風呂に湯が出ないことは同じである。それでも、風呂の水を汲まなくて良いだけはましで、床が濡れることはなかったのである。ただし、トイレットペーパーがないのは当然。

乗合いバス

翌日はバス（15人乗り程度の乗合バス）で移動。スタートして1時間、バスは小さな村の中で停車。トイレ休憩だという。先を歩く数人の中国人の後をついて行くと、何やら建物の塀の中へ。そう、みんな揃って日中国際連れションである。それが何の建物なのかはわからないが、公共の建物のようではあったが、迷惑な話である。かく言う私も我慢ができず並んで用をたしてきた（ごめんなさい）。ところが驚くことに、並んだ塀超しになんと共同トイレが見えたのだ。そのトイレを誰も使おうとはしないし、バスの運転手もそれが当然と考えているように見える。今考えると、使わない理由を聞くべきであった。さらに、車の乗客の一人の老人が共同トイレの外でズボンを降ろして座り込んでしまったのである。もちろん、車の乗客や道行く人にも丸見え。その老人、何事もなかったように車に乗り込んできた。

同じようなことは他でも目撃した。ハルピン空港から市街地に向かうメイン道路は見事な並木道で、その外側に歩道が並ぶが、その脇で座り込んでウンチしている大人を何回か目撃したのである。

そんな座り込みも男ばかりではなかった。シーチから満州里（マンチューリ）へ向かうバスの後輪がパンクした。狭いバスに飽きていた乗客は一人また一人と、車外へ。そのうちに、男達は連れ立って道り込む一人の婦人。他人に目をまったく気にする気配がない。

マンチューリはかつてロシアが作った街で、いたる所にロシアを感じさせられ、多くのロシア人が闊歩している小粋な街である。そんな街のデパート。品数は少ないが、展示は奇麗にまとまっている。そんなデパートのトイレが、なんと男女1づつの和式トイレで、コンパネで囲まれただけである。水洗トイレではあったが、2度目に入った時にとんでもないものを見てしまった。なんと、健康そうな大きなウンチが便器の真ん中にでんと控えたままなのである。そのウンチの主の前に使った人が新聞紙を使ったために、つまってしまい、くだんのウンチが流れなくなっていたようだ。

ハルピンの大きなデパート。そこで、仕切りがないようなトイレを経験することができた。そのデパートは品数は少ないものの、店員が中国人であるというだけでほとんど日本のそれとまったくかわらないデパート。そこのトイレは真ん中に幅20 cmくらいの水路があって、そこをウンチが流れるようになっている。使用者はその水路を跨ぐのだが、隣との仕切りが1 mくらいで座る時に前の人の尻が見える、その人がこちらを向いていれば顔を会わせることになる。幸いと言うべきか不幸と言うべきか、俺の場合は一番外側しか空いていなかったのでそこに座ったが隣人には尻を向けてしまった。しかし、その場所は水路の低い方のはずれで皆のウンチが流れて来る場所なのである。それでも、水の流れてくる前に用を済ませたので流れる他人のウンチを見ずに済んだのは幸いであった。

2008年には北京オリンピックが開催され、急激に近代化している中国のこと。こんな話も昔話になっているのだろう。

最後になりましたが、調査にお誘いいただいた高槻さん（東京大学総合博物館）やその他の調査メンバーの方々にはお世話になりました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

平成16年度自然環境教育センター事業報告

センターの教育研究活動

1．奈良実習園における教材用各種作物の栽培（ソバ，マメなど）
2．奈良実習園で育てたタマネギの苗とハボタンを地元に販売
3．奈良実習園の花木園、教材用果樹園、ガラス温室、花檀と池の管理
4．近畿地区教員養成大学農場等協議会参加（和歌山大学、12月）
5．センター主催の公開講座など
「米作り体験教室」（奈良実習園、小学生・40名、大学等地域開放特別事業）
第１回（６月12日午前、田植え）、第２回（10月２日午前、稲刈り）、第３回（12月11日午前、もちつき）
「夏の森を楽しもう」（奥吉野実習林にて，親子７組15名）７月23日～25日

センター施設利用状況

1．奈良実習園で行われた学生の授業や実習
栽培実習（前期15回、計195名）、幼児と環境（前期３回、計60名、後期１回、24名），総合演習（前期12回、計132名）、環境教育（後期12回，計48名）、社会科教育演習（後期１回、２名）、身近な自然学（前期３回、30名）
2．奥吉野実習林で行われた学生の授業や実習
教科「生活」野外集中授業（３泊４日47名）
「生物学野外実習ＡＩ（林間実習）」（４泊５日、17名）
3．奥吉野実習林を利用した公開講座など
「夏の森を楽しもう」（自然環境教育センター公開講座、３日、親子７組15名）
4．奥吉野実習林を使用した大学外の団体による研究、特定研究集会
鳥獣害対策検討会（奈良県農業技術センター、１件２日15名）
5．NPO法人などの団体による奈良実習園の利用
社会福祉法人「ならのは倶楽部」の高齢者施設利用者と施設スタッフによる園芸活動（３日、計35名）
特定非営利活動法人「奈良NPOセンター」企画「もうひとつの学び舎」の食農教育プログラム「ソバ、野菜の栽培」 小学生とその家族、奈良NPOセンタースタッフ（９日、計102名）
ボランティアサークル「なかよし広場」（西ノ京養護学校）（２日、計20名）
6．奈良実習園利用状況
（１）附属学校の奈良実習園での実習
附属幼稚園によるヨモギ摘み（１回、30名）
附属幼稚園園児によるジャガイモの花と昆虫の観察（１回、60名）
附属幼稚園園児によるジャガイモ掘り（１回、121名）
附属幼稚園園児によるサツマイモ掘り（１回、148名）
附属小学校児童による苗代の観察（１回、110名）
附属小学校児童によるサツマイモ植付け（１回、110名）
附属小学校児童によるサツマイモの栽培作業（１回、40名）
附属小学校児童による田植え（１回、110名）
附属小学校児童による稲刈り（１回、110名）

附属小学校児童によるサツマイモ収穫（1回、110名）

（2）その他の学校などによる奈良実習園での実習

奈良市内幼稚園園児によるジャガイモ掘り（2回、161名）

奈良市内幼稚園園児によるサツマイモ掘り（10回、867名）

（3）温室での栽培植物（マツバラン，科学の祭典用）貸し出し（1回、1日）

7．奥吉野実習林の利用状況（詳細は別紙，本学授業，実習以外の概略は以下のとおり）

（1）フレンドシップ事業「わくわく自然観察」（3泊4日、17名）

（2）日本生物教育学会全国大会夏期研修　（2泊3日、26名）

（3）奥吉野実習林における本学教職員等の体験学習、研修会、観察会、研究会等

3件7日39名

（4）奥吉野実習林における本学教職員以外の団体の体験学習、研修会、観察会等

農業技術鳥獣対策会（奈良県農業技術センター）1件、1泊2日、15名

（5）セミナー、合宿研修など（4件11日38名）

（6）日帰り利用

清水峰登山（多数）

平成16年度　奈良実習園利用状況

団　体　名	利用期間	日　数	利用人員	利用目的
奈良カトリック幼稚園	6／10	1	46	ジャガイモ掘り
奈良教育大学附属幼稚園	6／15	1	121	ジャガイモ掘り
奈良市立済美幼稚園	6／17	1	69	ジャガイモ掘り
親愛幼稚園	6／18	1	92	ジャガイモ掘り
極楽坊保育園	10／6	1	240	サツマイモ掘り
いさがわ幼稚園	10／15	1	62	サツマイモ掘り
愛染幼稚園	10／18	1	54	サツマイモ掘り
愛の園保育園	10／21	1	47	サツマイモ掘り
奈良カトリック幼稚園	10／22	1	40	サツマイモ掘り
(財) 奈良ＹＭＣＡ	10／25	1	77	サツマイモ掘り
奈良市立飛鳥幼稚園	10／28	1	117	サツマイモ掘り
奈良教育大学附属幼稚園	10／28	1	148	サツマイモ掘り
奈良市立東市幼稚園	10／29	1	20	サツマイモ掘り
親愛幼稚園	11／5	1	139	サツマイモ掘り
奈良育英幼稚園	11／8	1	71	サツマイモ掘り
公開講座「米作り」体験教室	6／12	1	36	ガイダンス・田植
〃	10／2	1	36	稲刈り
〃	12／11	1	32	餅つき
授業「幼児と環境」	前期	3	60	サツマイモ植え他
授業「栽培実習」	前期	15	195	各種農作物と花器類の栽培
授業「総合演習」	前期	12	132	各種農作物の栽培
授業「身近な自然学」	前期	3	30	自然観察
授業「環境教育」	後期	12	48	ソバ、ギンナン等栽培加工
授業「幼児と環境」	後期	1	24	サツマイモ掘り
授業「社会科教育演習」	後期	1	2	ソバ、カキなどの栽培、収穫、加工
合　計			1938	

平成16年度　奥吉野実習林及び宿泊施設等利用状況

団体名	利用期間	日数	利用人員	利用目的
近代文学研究室	4／25 ～ 4／25	2	11	卒論製作及びゼミの親睦を図る
劇団キラキラ座	5／3 ～ 5／5	3	6	合　宿
野外観察会	7／3 ～ 7／4	2	3	植物等を観察
奈良教育大学	7／6 ～ 7／7	2	3	公開講座に伴う登山表示確認
奈教大附中裏山クラブ	7／22 ～ 7／23	2	23	野外活動実習
奈良教育大学	7／23 ～ 7／25	3	27	公開講座（夏の森を親子で楽しもう
松井研究室	7／27 ～ 7／31	5	17	野外実習
日本生物教育学会	7／31 ～ 8／2	3	26	自然観察
川崎研究室	8／7 ～ 8／9	3	10	代数学のセミナーを行うため。
教科「生活」	8／16 ～ 8／19	4	47	集中講義
岡村研究室	8／23 ～ 8／27	4	17	フレンドシップのため（一泊テント）
教育学部　国語教育講座	8／31 ～ 9／2	3	11	卒論等の中間発表ゼミの合宿
自然誌専修	11／13 ～ 11／14	2	9	自然観察会
合　計		38	210	

平成17年度自然環境教育センター事業報告

センターの教育研究活動

1．奈良実習園における教材用各種作物の栽培（ソバ、マメなど）
2．奈良実習園で育てたタマネギの苗とハボタンを地元民を中心に販売
3．奈良実習園の花木園、教材用果樹園、ガラス温室、花檀と池の管理
4．近畿地区教員養成大学農場等協議会参加（奥吉野実習林、11月7、8日）
5．センター紀要第7号発行（11月30日）
6．自然と教育第16号発行（予定、3月）
7．センター主催の公開講座など
　「米作り体験教室」（奈良実習園，小学生・親40名，大学等地域開放特別事業）
　　第1回（6月11日午前、田植え）、第2回（10月1日午前、稲刈り）、第3回（12月10日午前、もちつき）
　「夏の森を楽しもう」（奥吉野実習林にて、親子8組20名）7月22日～24日
　第一回自然教室「チーズ作り」6月18、19、7月8日（10名参加）
　第二回自然教室「チーズ作り」10月1、2、3、22日（6名参加）

センター施設利用状況

1．奈良実習園で行われた学生の授業や実習
　栽培実習（前期15回、計195名）、幼児と環境（前期3回、計105名、後期1回、30名）、総合演習（前後期20回、計200名）、環境教育（後期10回、計150名）、社会科教育演習（後期3回、21名）、身近な自然学（前期4回、16名）、生物学実験（後期2回、25名）
2．奥吉野実習林で行われた学生の授業や実習
　教科「生活」集中授業（3泊4日、40名）
　「生物学野外実習A－I（林間実習）」（4泊5日、24名）
　野外生活（2泊3日、5名）
3．奥吉野実習林を利用した修士論文，卒業論文のため等の研究活動

植物生態学研究室９回のべ32日

４．奥吉野実習林を利用した大学外の団体などによる研究、集会活動

奈良女子大学加藤（２日）

紀伊半島野生動物研究会（２日）

５．奥吉野実習林を利用した公開講座など

「夏の森を楽しもう」（自然環境教育センター公開講座、３日、親子８組20名）

フレンドシップ事業（５日、19名）

６．奥吉野実習林の観察会、合宿、セミナー、その他の利用

（１）観察会　２回４日

（２）合宿、ゼミなど　８回21日

（３）近畿地区教員養成系農場等協議会開催（１回２日）

（４）日帰り利用　　清水峰登山（多数）

７．奈良実習園利用状況

（１）附属学校の奈良実習園での実習

附属幼稚園によるヨモギ摘み（１回、50名）

附属幼稚園園児によるジャガイモの花と昆虫の観察（１回、58名）

附属幼稚園園児によるジャガイモ掘り（１回、122名）

附属幼稚園園児によるサツマイモ掘り（１回、145名）

附属小学校児童による苗代の観察（１回、110名）

附属小学校児童によるサツマイモの栽培と収穫（２回、115名）

附属小学校児童による米作り体験（４回、106名）

（２）その他の学校などによる奈良実習園での実習

奈良市内幼稚園園児によるジャガイモ掘り（３回、231名）

（３）卒業研究など

大豆栽培と通しての総合的な教育実践（生活科履修分野）

学生企画活動支援事業の課題（休耕田における生物の推移、自然誌分野の学生等）

（４）公開講座，自然教室

米作り体験教室　３回、親子30組

自然教室「チーズ作り」２回５日合計16名

（５）センター協力研究員による研究活動

グアノによるトマトの栽培

シカによるイラクサの忌避性に関する研究

（６）本学以外での研究教育活動による利用

独立行政法人「都市再生機構」によるRDB某物の一時避難に関する研究

（７）NPO法人などの団体による奈良実習園の利用

社会福祉法人「ならのは倶楽部」の高齢者施設利用者と施設スタッフによる園芸活動（３日、のべ35名）

特定非営利活動法人「奈良NPOセンター」企画「もうひとつの学び舎」の食農教育プログラム「ソバ、野菜の栽培」小学生とその家族，奈良NPOセンタースタッフ（８日、計90名）

ボランティアサークル「なかよし広場」（西ノ京養護学校）（５日、計30名）

（８）授業での利用

幼児と環境、社会科教育演習、環境教育、総合演習，身近な自然学、栽培実習、生物学実習

８．その他（センター紀要が電子化、みんなが主役の環境教育シンポジウムの後援になる、センターホームページの「バランスコウモリ」が富士川町立第二小学校で利用）

平成17年度　奈良実習園利用状況

団　体　名	利用期間	日　数	利用人員	利用目的
極楽坊保育園	６／８	1	65	ジャガイモ掘り
奈良カトリック幼稚園	６／９	1	85	ジャガイモ掘り
親愛幼稚園	６／10	1	108	ジャガイモ掘り
奈良教育大学附属幼稚園	４／11	1	50	ヨモギつみ
〃	５／13	1	61	ジャガイモの花の観察，虫採り
〃	６／７	1	130	ジャガイモ掘り
〃	10／20	1	2	カキの収穫
〃	10／25	1	167	さつまいもほり
奈良教育大学附属小学校	5、6、7、10月	4	436	米作り体験　106名教員３名
〃	5、10月	2	236	サツマイモの栽培活動
公開講座「米作り」体験	６／11	1	36	ガイダンス・田植
〃	10／１	1	36	稲刈り
〃	12／１０	1	36	餅つき
自然教室（一般）	６／18、19、7／3	1	36	第一回自然教室「チーズ作り」
自然教室（一般）	10／1、2、3、22	4	32	第二回自然教室「チーズ作り」
卒業研究（生活科履修分野）	６月～11月	5	5	大豆栽培を通しての総合的な教育実践
卒業研究（生活科履修分野）	５月～11月	10	10	身近な植物を用いた「お茶作り」の教材開発研究
学生企画活動支援事業の課題	春～冬	18	90	休耕田における生物の推移
ボランティアサークルなかよしひろば	春～秋	5	65	サツマイモなど農作物の栽培
社会福祉法人ならのは倶楽部	春～秋	3	54	サツマイモ栽培と収穫
NPO法人「奈良NPOｾﾝﾀｰ」	春～秋	8	90	食農ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ「もうひとつの学び舎」
センター協力研究員の研究	10／22～11／14	5	5	イラクサに関する実験
センター協力研究員の研究	春～秋	8	16	グアノによるトマトの栽培実験
授業「幼児と環境」	前・後期	4	135	サツマイモの栽培活動
授業「社会科教育演習」	後期	3	63	ダイズの栽培，収穫，加工
授業「環境教育」	後期	10	150	ｿﾊﾞ、カキ、ｷﾞﾝﾅﾝ、ｸﾘ、ﾄﾞﾝｸﾞﾘの栽培、収穫、加工
授業「総合演習飛び出せﾌｨｰﾙﾄﾞ探検隊」	前・後期	20	200	各種農作物の栽培と収穫
授業「身近な自然学」	前期	4	16	動物観察と採集
授業「栽培実習」	前期	15	195	各種農作物と花卉類の栽培
授業「生物学実験」	後期	2	75	植物の栽培
独立行政法人都市再生機構	春～秋	4	16	RDB動物の一次避難に関する研究
合　計			2695	

平成17年度　奥吉野実習林及び宿泊施設等利用状況

団　体　名	利用期間	日　数	利用人員	利用目的
棚橋研究室	5／28～5／29	2	8	卒業論文研究
植物生態学研究室	6／14～6／16	3	2	学校林調査（課題研究）
松井研究室	7／18～7／22	5	24	林間実習
自然環境教育センター	7／22～7／24	3	31	公開講座（夏の森を親子で楽しもう）
奈教大附中裏山クラブ	7／30～7／31	2	27	合宿
大学祭実行委員会	8／6　～8／8	3	26	合宿
植物生態学研究室	8／11～8／12	2	4	修士論文の調査
川崎研究室	8／10～8／12	3	8	代数学のセミナー
植物生態学研究室	8／16～8／19	4	3	修士論文の調査
春日苑1丁目子供会	8／20～8／21	2	11	大塔の夏山の自然にふれる集い
生活科教員	8／19～8／22	4	40	「生活」集中授業
奈良教育大学野外運動研究室	8／22～8／26	5	19	フレンドシップ事業
近代文学研究室（日高ゼミ）	8／31～9／2	3	13	近代文学共同研究のための合宿
植物生態学研究室	8／29～9／1	4	4	修士論文の調査
植物生態学研究室	9／2　～9／5	4	2	修士論文の調査
村尾　栄治	9／5　～9／6	2	2	調査
障害児教育研究室	9／10～9／12	3	10	卒業論文の検討
劇団キラキラ座	9／12～9／14	3	9	合宿
植物生態学研究室	9／14～9／16	3	2	修士論文の調査
村尾　栄治	9／15～9／16	2	3	調査
村尾　栄治	9／20～9／22	2	1	調査
田中　棟一	9／25～9／26	2	15	元職員の親睦会
鳥居春己	9／26～9／28	3	5	授業「野外生活」
自然環境教育センター	11／7　～11／8	2	21	近畿地区教員養成系大学農場等協議会
岩本研究室	11／26～11／22	2	7	学外研修
植物生態学研究室	11／17～11／13	3	3	修士論文の調査
奈良女子大 加藤禎孝	12／17～12／12	2	8	造林グループ　森林の観察
紀伊半島野生動物研究会両生爬虫類研究グループ	12／10～12／12	2	4	シャクヤク沢のサンショウウウオ及び両生類の棲息状況の調査
植物生態学研究室	1　／23～1／25	3	9	ゼミ合宿
合　　計		83	321	

（五條市役所　岸本氏提供）

今年（2006年）も全国的にツキノワグマの出没が世間を賑わした。奈良県内でも五條市で11月に3回4頭がイノシシ捕獲用の罠で錯誤捕獲された。最初の1頭は110kgの大型の雄で、紀伊半島にもこんな大きい個体がいたのかと驚いた。次の雄は59kg、最後は51kgの母親と19kgの春生まれの雄だった。

紀伊半島のクマは絶滅が危惧される個体群であることから、錯誤捕獲された場合は可能な限り生かしたまま放逐することになっている。成獣2頭は発信器を装着し（子どもには発信器を装着していない）、無事に放逐することができたが、残念なことに2頭目の雄は作業中の事故で死亡してしまった。1頭目は2週間後には放逐地点付近にいたことが確認されている。しかし、その後は確認できていないが、冬眠しているからだろう。

上の写真は母親だが、事故の防止のため、口を塞いでいるところである。クマの足下にあるのが発信器である。クマに成り代わって猟友会や県関係機関の方々のご協力に感謝します。

編集後記

今回も今野さんにセンター主催の公開講座「夏の森を親子で楽しもう」についての原稿を寄せていただきました。キャンプ生活を「総合学習」の視点から整理してくれました。16号と続けてお読みいただければ、具体的な活動までイメージしてもられると思います。

最近は教育現場から解剖が消えてしましました。子どもを交えて解剖を行い、成果を上げている「なにわホネホネ団」なる集団を紹介させていただきました。興味のある方はＨＰから連絡先をお探し下さい。

奈良と言えばシカを多くの方が思いだすことでしょう。そのシカとのつき合いの一面を紹介してもらいました。シカと奈良市民のつき合いの一面を表していると考えます。しかし、一部に不謹慎（？）と言われかねない記述もあり、匿名とさせていただきました。

内蒙古調査紀行（Ⅱ）をまとめました。野外調査を志す学生諸子の参考になればと幸いです。これからも調査紀行を紹介しようと考えています。

次号はなるべく早い時期に発行したいと考えていますので、原稿をお寄せ下さい。（鳥居春己）